

空手道と人間形成

石原 弘一

私が初段を取ってから4年以上が経つ。その間の時間は長くも短くも感じたが、何にせよ私にとっては初段になったときが入口に立ったときである。

少し昔の話になるが、メガロスの少年部で活動していた頃は特に何も考えなしに稽古をしていて、それで自分ができているつもりでいた。しかし、八王子道場に通り始めてから自身の未熟さを、嫌というほどに痛感した。それからすぐの昇段審査も酷い動きをしていたことが記憶にある。その時から私は自分が有段者だと誰に対しても堂々と言えるように実力をつけることを目標にしてこれまで取り組んできた。

今回の昇段までの間に多くの経験をしたが、その中でも自身のターニングポイントとなったきっかけは高校の部活動である。剣道部であるし、空手とは同じ武道であること以外に特にこれといった関係は無いように思っていたが、この経験が私に考えさせるきっかけを与えてくれた。

私は剣道部で公式の試合に出たことが無かった。周りの実力が高かったということもあるが、何よりも私自身の実力が無かった。練習を毎日していても実力はつかないし、仲間たちには差をつけられていくばかりでなぜ自分には能力が無いのかを悔やむばかりだった。そのまま引退がすぐ目の前まで迫っていた時、ふとしたきっかけである考えが浮かんできた。自分がやってきたのはただ頑張ることだったのではないだろうかと考えた。確かに、朝の素振りから放課後の稽古まで一生懸命に全力でやってきたが、結局のところそれだけである。どうやって竹刀を振るかに心血を注ぐばかりで、どうやって竹刀を相手に叩き込むかを考えなかった結果、実際に試合をやってみて勝つこともできず、大した成績も残せずに短い高校生活を終わらせてしまった。

この如何にして相手に攻撃を当てるということは、私にとって空手と何ら変わりはない。直突きも、下突きも、回し蹴りだって出すタイミングを間違えれば手痛いカウンターをもらう。中学まで何も考えずに攻撃一辺倒の組手しかしていなかった私には、この剣道を通した生活は大きな変化をもたらすきっかけになった。練習中に工夫を加えようと考えようになったのはそれからである。今回の組手審査でTSスタイルが導入されたことは大きなことであると思う。防御も正確に行い、正確な部位へ攻撃を当てるのはまさに自分がやりたいことだったので、やる気は十分に出た。

結果的に、現在は自分で思っているような組手での動きはできていない。それどころか自分の弱点や意識の薄さが新しく浮き彫りになっていくばかりである。しかし、気づくことはできた。自分自身の動きに問題があるのに気づいたことと、それを変えようと考え動く努力をし始めたことは大きな変化だろう。それでも今自分のできていることはたかが知れている。10年くらい無駄に過ごしてとても遠回りをしたような気分ではあるが、それらも全て経験の一部であったとみて今後の修練に努めていきたいと思う。